

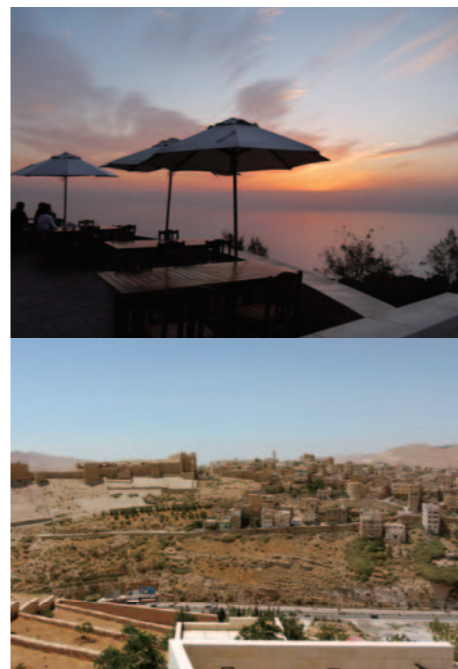
エコミュージアムとは、町中にあるリビングヘリテージ(生きた遺産)を観光資源として活用し、町全体を博物館に見立てるといふ発想。つまり、サルト市内にある建物、樹木、道、さらには地域の人までがその資源になりうるのだ。「サルトはもとも商人の町ということもあり、ホスピタリティーにあふれています。個性的なイスラム建築やスーク(マーケット)など、地域の人にとっては、当たり前にあるものに実は魅力があるんです。ヨルダン人の心や文化のル

ーツを示す舞台としては、最適な観光地だと確信しています(西山先生)。
エコミュージアムの実現に向けて、08〜2010年、JICAは青年海外協力隊で構成された調査チームを派遣。エコミュージアムの全体計画を立てた上で、まずはサルトの風情ある町並みを構成する「建築物」に注目し、自ら町を歩いて、建築年代や敷地面積、素材、装飾など、さまざまな角度からデータを収集し、「壁に建築された年代が刻まれている地域特有の黄色の石灰岩が使われていたり、観光資源としてアピールできる、歴史的な建築物がたくさんあることが分かりました」と調査メンバーの村上佳代さん。サルトに昔から伝わる話などを聞くために、町の歴史に詳しい「古老」と呼ばれる人々にも話を聞いたという。訪問先の民家では最初、「何のために？」という顔をされることも多かった。しかしその度に、隊員たちはサルトの歴史的価値、エコミュージアムの説明を続けた。サルトの町の魅力を伝えたい。目指すものは極めてシンプルだ。「そのうち私たち隊員の存在が広まっていくって、朝

歴史資料館のオープンを間近に控えるサルトでは、さらなる観光の可能性を探るべく「サルト・エコミュージアム」の計画が進められている。首都から車で約30分、3つの小高い丘に囲まれた町並みが美しく、どこかふるさとに帰って来たような懐かしささえ感じる。特に大きな観光資源がある訳ではないが「ポテンシャルにあふれた町」であると、JICAのサルト観光開発に協力する北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明教授は言う。

エコミュージアムで環境にも配慮

「ごはんを食べて行かない?」とか「今度マンサフ食べにいいよ」とか、温かい言葉を掛けてくれるようになりました。こういう地元ならではの文化に、観光客にも触れてほしいですね」と期待する。



(上)死海博物館に併設される展望台レストラン。遠くパレスチナを望み、地元の人にも親しまれている
(下)展望台から見るカラク城。誰もが圧倒される存在感を持つ

丘に囲まれたサルトの町並み。「日本でいう京都。外国人観光客に推薦したい場所です」(西山先生)

「観光」を国の産業の柱に
ヨルダンに「マンサフ」と呼ばれる伝統料理がある。羊を丸ごと煮込み、各家庭に伝わる味付けで仕上げる。お祝い事や客をもてなす時には欠かせない一品だ。ヨーロッパなどに比べて、日本からの観光客がまだ少ない中東地域。観光ガイドブックには載っていない、こうした人情味あふれた食文化があることは、残念ながらあまり知られていない。

しかし今、ヨルダンでは観光産業に対する可能性が高まっている。死海や世界遺産のペトラ遺跡、映画「アラビアのロレンス」の舞台にもなったワディラム砂漠だけでなく、さまざまな時代を象徴する遺跡や建築物は、私たちを歴史の教科書のよきな世界に導いてくれる。実際、欧米諸国を中心に観光客は年々増加。観光産業は、貿易外収支の2割を占めている。
JICAも早くからこの可能性に注目し、1994年にヨルダン全土を対象に観光開発のための調査を開始。調査結果に基づき、99年からは円借款により、首都アンマン、死海、カラク、サルトの4地域を対象に、観光ゾーンや博物館などの整備を行ってきた。さらに2004〜07年には、「博物館活動を通じた観光振興プロジェクト」を実施。円借款で整備した4つの博物館を対象に、自立的運営に向けた能力強化を行った。
すでに開館しているカラク考古博物館と死海博物館では、カラク城や死海など、観光名所についての知識を深めることができると評判で、新たな観光スポットとして定着しつつある。

“生きた遺産”を地域の資源に

今、新たな観光地として注目が集まっている中東。特に、死海やペトラ遺跡など、豊富な観光資源に恵まれているヨルダンでは、さらなる経済発展のため、観光産業に対する期待が高まっている。JICAもその可能性に注目し、ソフトとハードを組み合わせた包括的な支援を行っている。



from
JORDAN



地元の子どもたちを対象にお菓子の家を作るイベントを実施。ウェハースやチョコレートなどを積み上げ、サルトの伝統建築を模したケーキを作った。サルトの伝統建築や歴史について、興味を持って勉強してもらおうのが狙い

「エコミュージアムの主役は現地の人たち。まずは彼らに、私たち日本人から見たサルトの魅力や魅力を伝えたいんです」。さらに、現地の人の手で調査を続けていけるよう、観光遺跡省や博物館の職員らを対象に調査手法を指導。データベースの使い方の講習会などを行った。本格的なエコミュージアムの実現に向けて、JICAもさらなる支援



サルトにある建築物を一軒一軒調査。「町を歩けば歩くほど、さまざまな魅力が見えてきました。教育、歴史、宗教などでカテゴリ分けして、観光プランを作っていければ」(村上さん)

を続けていく方針だ。「煙の出ない、つまり環境に優しいエコミュージアムが、観光分野で果たす役割は非常に大きい」と西山先生。「途上国が自律的發展に向け、自国に誇りを持つて取り組める最適なアプローチでもあります」。
町を守りながら、自分たちの文化を観光資源として生かしていく。サルトのエコミュージアムが、途上国の「町の観光モデルになることを期待したい。